京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（3 年計画の 2 年目）

１．研究課題

「語りえぬもの」を語る行為とその思想表現に関する学際的研究ー禅の言葉と翻訳を中心課題としてー

An Interdisciplinary Study on the Behavior and Expression concerning "What We Cannot Speak About" - with a Focus on the Language and Translation of Chan/Zen Buddhism”

２．研究代表者氏名

何　燕生

HE, Yansheng

３．研究期間

2022 年 4 月-2025 年 3 月(2 年目)

４．研究目的

グローバル化や AI 化が進む現代社会において、そもそも「言葉」と「翻訳」にはどのような意味があるのか。本研究は、「言葉」と「翻訳」という古くて新しい問題を東アジアにおいて形成された禅仏教をケースとして考察することを目的とする。禅は、「不立文字」と言い、言葉を否定的に捉えようとする一方、語録や公案、灯史など膨大な量の言葉群を残している。矛盾にも見える禅と言葉とのこのような関係を一体どのように捉えたらよいのか。「語りえぬものについては沈黙せねばならない」という捉え方があるが、禅では、沈黙だけでなく、時には「道え!道え!」と、語ることも求められる。一方、和語、漢語および近世中国の俗語を駆使して必死に語ろうとしたのは日本の禅僧道元だが、道元による禅の日本語化の持つ意味は一体何なのか。さらに、近代では禅が欧米へと「翻訳」され、英語、フランス語などの言語で語られ、異文化との接触によって脱文脈化しつつある。禅のそうした「越境性」について、またどのような分析枠が可能であろうか。本研究は、これまでの研究を踏まえ、今日的な問題をも視野に入れて、禅の「言葉」と「翻訳」の問題をめぐり、国内外の研究者との連携をはかりながら、学際的に研究するというものである。

Against the backdrop of globalization and evolution of AI in modern society, what is the ultimate significance of “words” and “translations”? In this study, the author focuses on the issue of “words” and “translation” and analyzes examples found in Chan/ Zen Buddhism.The core concept of “No attachment to words” (不立文字) in Chan Buddhism is indicative of a negative attitude toward “words”, whereas a voluminous amount of direct quotations from Buddhist monks, koans(公案), and Buddhist lineages are well preserved in documents. To

what extent could we understand and explain this paradox? One opinion highlights the fact that “one must be silence about what cannot be spoken of” (Wovon man nicht sprechen kann, darüber muss man schweigen). It is undoubtedly true that silence is emphasized in Chan/Zen Buddhism, yet occasionally a practitioner is also required to “speak”! The Japanese Zen Master Dogen completed very important Japanese works by incorporating Japanese, Chinese and medieval Chinese vernacular terms into his discourse. What is then the role that Dogen played in the Japaneseization of Zen? Since Chan/Zen has been introduced to the West through translations in modern times, Chan/Zen Buddhism in the English and French contexts is being decontextualized along with its contact with different cultures. What is the effective analytic method for the nature of “cross-boundary” in Chan.Zen? In this present interdisciplinary study, the author works with domestic and foreign scholars to address the issue of “words” and “translation” in Chan/ Zen Buddhism.

５．本年度の研究実施状況

2023 年度は基本的に年度当初の計画に沿って研究活動を実施した。研究会計 4 回、対面とオンラインを併合する形で、研究所本館大会議室を会場に実施した。

2022 年度と同様、午前は『弁道話』の会読、担当者は班長の何燕生、班員参加者は質疑応答という形で行われた。午後の研究成果報告会は班員による個別の研究成果が発表された。研究会は司会とコメンテータを含め、基本的に班員が中心に行われたが、専門分野を考慮し、研究班顧問の方に依頼することもあった。海外の班員にも司会やコメンテータなどを担当してもらった。なるべく「全員参加」を目指して実施した。

毎回の研究会は録画をし、都合により参加できない班員や時差の関係で参加できない海外の班員に URL を知らせ、情報の共有につとめた。

また、年度当初の実施計画である日本宗教学会学術大会でのパネル発表については、計画通り実施した。詳細は次のとおりである。日時:2023 年 9 月 10 日、会場:東京外国語大学、パネルのテーマ:「日本における禅受容の再検討－中世から近世へ－」(代表者：何 燕生）。発表者およびテーマ:「『弁道話』から読み取れるもの－初期道元の課題－」(班長・何 燕生)、「円爾の禅密諸典籍の利用と鎌倉中期の禅の展開」(班員・和田有希子)、「『密参禅』の由来と展開の再検討－下語の使用を手がかりに－」(班員・ディティエ・ダヴァン)、「看話禅の展開－大慧宗杲と白隠慧鶴を中心として－」(班員・柳幹康)、 コメンテータ(研究班顧問・末木文美士)、司会(班長・何燕生)。

さらに、年末に実施した第九回の研究会では「特別企画―禅研究の現在と未来」と題し、博士課程に在学している若手研究者に研究成果を報告してもらった。次世代育成にも配慮した。

６．本年度の研究実施内容

2023-04-29 第六回研究会 『弁道話』の会読 発表者 何燕生 班長 『正法眼蔵』の編集ならびに『弁道話』成立に関する諸問題について 発表者 角田泰隆 駒澤大学　コメンテーター 石井清純 駒澤大学　司会 古勝隆一　Self-as-Anything:道元における自己・世界・他者 発表者 出口康夫 京都大学　コメンテーター Raji Steineck チューリッヒ大学　司会 何燕生 班長

2023-06-24 第七回研究会 『弁道話』の会読 発表者 何燕生 班長 『宗鏡録』の思想と展開ー仏の自覚と実践 発表者 柳幹康 東京大学　コメンテーター 和田有希子 早稲田大学　司会 赤松明彦 京都大学 『正法眼蔵』における『法華経』の観心釈と『華厳経』利用 発表者 石井公成 駒澤大学　コメンテーター 早川敦 東北福祉大学　司会 赤松明彦 京都大学

2023-10-28 第八回研究会 『弁道話』の会読 発表者 何燕生 班長 古勝亮『中国初期前思想の形成』の刊行によせてー第 5 章「薬山系禅師の自己認識とその背景」を中心にー 発表者 齋藤智寛 東北大学　コメンテーター 程正 駒澤大学　司会 末木文美士 国際日本文化研究センター 道元の「一心」について 発表者 早川敦 東北福祉大学　コメンテーター 何燕生 班長　司会 水野友晴 関西大学

2023-12-23 第九回研究会 『弁道話』の会読 発表者 何燕生 班長 法眼宗から雲門宗へ: 宋代禅の始まりと「活句」の思想 発表者 土屋太祐 新潟大学　コメンテーター 石井修道 駒澤大学　司会 古勝隆一　特別企画「禅研究の現在と未来」1)2023 年度の禅研究を振り返って 発表者 何燕生 班長 2)発心を中心とした道元思想の研究 発表者 米野大雄 早稲田大学大学院 道元における自然観 発表者 李家明 国際日本文化研究センター大学院司会 何燕生 班長

７．共同研究会に関連した公表実績

日本宗教学会学術大会でのパネル発表である。2023 年 9 月 10 日、東京外国語大学を会場に、「日本における禅受容の再検討－中世から近世へ－」というテーマで、班長何 燕生が代表で企画実施した。発表者およびテーマは次の通り。「『弁道話』から読み取れるもの－初期道元の課題－」(班長・何 燕生)、「円爾の禅密諸典籍の利用と鎌倉中期の禅の展開」(班員・和田有希子)、「『密参禅』の由来と展開の再検討－下語の使用を手がかりに－」(班員・ディティエ・ダヴァン)、「看話禅の展開－大慧宗杲と白隠慧鶴を中心として－」(班員・柳幹康)、 コメンテータ(研究班顧問・末木文美士)、司会(班長何燕生)。同パネルの企画趣旨、それぞれの要旨および発表のまとめは日本宗教学会機関誌『宗教研究』第 97 巻別冊 79-86 ページに掲載された。

８．研究班員

所内

WITTERN, Christian、古勝隆一

学内

上原麻有子(大学院文学研究科)、出口康夫(大学院文学研究科)、中村慎之介(京都大学文学部)、一色大悟(京都大学学術研究展開センター)

学外

何燕生(郡山女子大学)、頼住光子(東京大学大学院人文社会系)、斎藤智寛(東北大学大学院文学研究科)、柳幹康(東京大学東洋学研究所)、浅見洋二(大阪大学大学院文学研究科)、土屋太祐(新潟大学経済学部)、余新星(花園大学文学部)、小川隆(駒澤大学総合教育研究部)、石井清純(駒澤大学仏教学部)、角田泰隆(駒澤大学仏教学部)、安藤礼二(多摩美術大学美術学部)、飯島孝良(花園大学国際禅学研究所)、重田みち(京都芸術大学通信教育学部)、水野友晴(関西大学文学部)、和田有希子(早稲田大学)、小川太龍(花園大学)、早川敦(東北福祉大学)、ディティエ・ダヴァン(国文学研究資料館)、李家明(国際日本文化研究センター大学院)、周裕鍇(四川大学)、王頌(北京大学)、呉根友(武漢大学)、龔雋(中山大学)、馮国棟(浙江大学)、李建欣(中国社会科学院)、江静(浙江工商大学)、蒋海怒(浙江理工大学)、ジャン＝ノエル・ロベール(コレジュ・ド・フランス)、ベルナールフォール(コロンビア大学)、呉疆(アリゾナ大学)、ラジ・シュタイネック(チューリッヒ大学)、ゲレオン・コブフ(ルター大学)、スザナ・クボウチャコバ(マサリク大学)、林佩瑩(政治大学)、肖琨(暨南大学)、李瑄(四川大学)、張超(フランス国立高等研究実践学院)、沈庭(武漢大学)、今西智久(株式会社　法蔵館)

9．共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数（必須）	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生
人文研所属	1	2	0	0	0	0	20	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
京大内（人文研を除く）	3	3	0	0	2	0	21	0	0	15	0
（内女性）		(2)	(0)	(0)	(1)	(0)	(18)	(0)	(0)	(10)	(0)
国立大学	3	3	0	0	0	0	17	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
公立大学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
私立大学	3	5	0	0	0	0	32	0	0	0	0
（内女性）		(2)	(0)	(0)	(0)	(0)	(12)	(0)	(0)	(0)	(0)
大学共同利用機関法人	2	3	0	0	0	0	22	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
独立行政法人等公的研究機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
民間機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
外国機関	8	8	0	0	0	0	63	0	0	0	0
（内女性）		(2)	(0)	(0)	(0)	(0)	(20)	(0)	(0)	(0)	(0)
その他　※	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
計	20	24	0	0	2	0	175	0	0	15	0
		(6)	(0)	(0)	(1)	(0)	(50)	(0)	(0)	(10)	(0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例）高校教員 無所属の場合は機関数０とカウントし、この欄の記載不要											

10．本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数		うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文（単著・共著）	0		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文（共著）	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	9		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文（共著）	2	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名	掲載論文数	掲載年月	論文名	発表者名
1	『思想』	1	R5.5	「Self-as-Anything: 道元における自己と世界と他者（上）」	出口康夫
2	『思想』	1	R5.7	「Self-as-Anything: 道元における自己と世界と他者（中）」	出口康夫
3	『宗教研究』	1	R5.9	「日本における禅受容の再検討―中世から近世へ―」	何燕生
4	『宗教研究』	1	R5.9	「『弁道話』から読み取れるもの―初期道元の課題―」	何燕生
5	『宗教研究』	1	R5.9	「パネルの主旨とまとめ」	何燕生
6	『宗教研究』	1	R5.9	「コメント」（研究班の特別企画による「日本における禅受容の再検討―中世から近世へ―」パネル発表に対するもの」	末木文美士
7	『宗教研究』	1	R5.9	「円爾の禅密諸典籍の利用と鎌倉中期の禅の展開」	和田有希子
8	『宗教研究』	1	R5.9	「『密参禅』の由来と展開の再検討―下語の使用を手がかりに―」	ディティエ・ダヴァン
9	『宗教研究』	1	R5.9	「看話禅の展開―大慧宗杲と白隠慧鶴を中心として―」	柳幹康
10	『思想』	1	R5.9	「 Self-as-Anything: 道元における自己と世界と他者（下）」	出口康夫
11	『禅研究所年報』	1	R5.12	「『正法眼蔵』の基本構造－『法華経』と『華厳経』の役割に注意して－」	石井公成

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

なし

12. 本年度博士学位を取得した学生の数

なし

13. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

14. 次年度の研究実施計画

2024 年度は研究会計 5 回を予定している。実施内容はこれまでと同様、午前は『弁道話』の会読、午後は研究成果の発表。具体的には次のようなスケジュールになる。

1 回目:4/27(土)
2 回目:6/22(土)
3 回目:10/19(土)
4 回目:11/30(土)
5 回目:(2025)2/8(土)

また、岩波書店が発行している『思想』で道元特集号を企画し、その実現に向けて取り組んでいく予定である。本企画は、班員の出口康夫氏が 2023 年の『思想』で道元に関する論文を連載したことがきっかけであり、関連分野の班員に声がけして実現したものである。特集号は 2024 年 9 月号に掲載される予定であり、寄稿論文の他に対談も企画した。本企画は本研究班の年度成果の一部である。

さらに、2024 年度は最終年度であるため、可能であれば最終回の研究会では海外の班員を招へいし、国際集会を行うことを考えている。海外の研究者が多く所属しており、また哲学、言語学、思想史、仏教学、翻訳学などの諸分野にわたるため、それらの特色を生かした国際シンポジウムの開催を目指す。

15. 次年度の経費

		開催回数	延べ人数	支出予定額（円）
国内旅費	一般旅費			
	招へい旅費	7	35	590000
海外旅費	一般旅費			
	招へい旅費	1	2	400000
謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の謝金）				
消耗品等経費				10000
その他				
合計				1000000

16. 研究成果公表計画および今後の展開等

本研究班の研究成果の公表を計画している。そのため、2024 年度は研究会の開催とともに、そのための準備に取り組んでいきたい。研究成果の公表はできれば拠点の助成金を申請し、報告書という形のものを出版社から刊行したい。刊行の時期は 2025 年度内と考えている。

本研究班は学際的・国際的な特色を持っており、しかも 47 名という規模のものであるた

め、3 年間という時間はもちろん不足であり、多くの問題が残ったままになってしまうのが実情であろう。しかし、この 2 年間、様々な議論が交わされ、新たな課題が見つかったため、今後はそれらを踏まえ、研究を深化させていきたいと考えている。さしあたり、班長何燕生が代表として申請した科研基盤 B の課題の採択を受け、できれば当該科研と連動しながら、研究を遂行していきたい。当該科研課題の分担者全員は本研究班の班員であり、これまでの 2 年間の共同研究を通じて生まれてき問題意識を共有している。当該科研の研究期間は四年であり、終了後はできれば報告書を刊行し、広く学界に寄与したい。